

海外子女・帰国生・継承語 学習者に対する日本語教育

ICU帰国生・継承語学習者への
日本語教育を考える会

2009/3/28 国際基督教大学にて

全体会

- I. 企画趣旨
- II. 講師紹介
- III. ICUの日本語教育プログラム(JLP)紹介
- IV. 各講師より
- V. 事務連絡(昼食、午後の会場など)

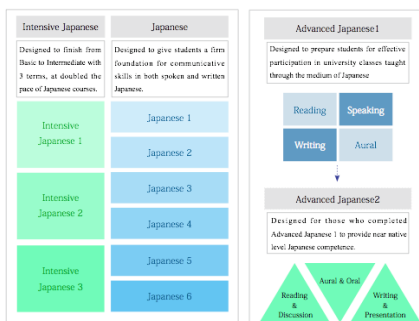
本日の講師

- ・カルダー淑子先生 (プリンス頓日本語学校)
- ・稲原教子先生(American School in Japan)
- ・津田和男先生 (国連国際学校)

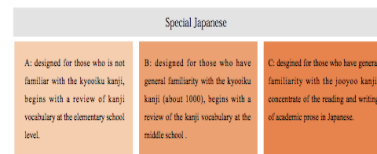
JLPの特徴

1. 学部教育である
2. 帰国生・国内の国際学校出身者も対象とする
3. 狭義の言語技術の習得に留まらず、*Critical thinking* や議論・論文執筆を含む総合的な学び

ICU JLPの4コースの関係：留学生のためのコース



JLPのコースの関係：帰国生のためのコース



SJA:3コマ×3学期 SJB: 2コマ×3学期 SJC: 2コマ×2学期

※どれもゴールは同じだが、SJAには達成は厳しい。

JLPにおける学生の学び

1. 留学生
 - 卒業要件であるAdv1までを履修する中での学び (Adv2も開講しているが選択科目)
2. 帰国生・国内の国際学校出身者
 - SJコースの各レベルを履修する中での学び

どちらも狭義の言語技術の習得に留まらず、*Critical thinking*や議論・論文執筆を含む総合的な学び

JLPの学生の変化: 留学生

1. 開学当初と比べて1年本科生(OYR)との比率が逆転し、4年本科生がマイノリティに。
2. “Intensive Japanese course”のスピードについていけない学生が増えている。
3. さまざまな意味で学習支援が必要な学生が増えている。
4. JLPには適当なコースがない継承語学習者が増えてきた。

留学生の変化がもたらす問題

1. 1年生に対しても3年生に対しても同じコースを提供することになってしまう。
2. 日本語で論文購読や論文執筆などができるレベルに達するまでに2年以上かかってしまう。
3. 日本語学習以外の科目での学習支援と連動させないと効果が得られにくい。
4. 語学要件のJLP学習でつまづいたり疎外感を感じたりすることで退学してしまうこともある。

JLPの学生の変化: 帰国生

1. 海外子女教育事情の変化の影響
2. 国内インター出身者の増加
3. 編入生の増加
4. 高校留学のみの者が帰国生枠で入学
5. 4月入学の帰国生の存在(ICUHS推薦と帰国枠入試)
6. 9月入学の日本人学生の減少

帰国生の変化がもたらす問題(1)

1. 継承語学習者を含めて学生が多様化し、語学面・心理面で細やかなケアが必要
2. 国内インターの教育のあり方の多様性から、学生に必要な教育の一般化が難しい
3. SJが単位の割に求められることが多いことは、特に編入生にとって困難である。

帰国生の変化がもたらす問題(2)

1. 帰国生枠で入学しても十分な英語力や思考力がない学生もいる。
2. 4月入学帰国生は日本語は語学の卒業要件にならないが、履修すべき日本語力の者がいる。
3. 9月入学の日本人学生の減少は、開設可能なコース数などにも影響を与える。学生の多様化によってむしろ現在よりも細やかな対応が求められる実情にはマイナス要因になってしまう。

JLPの学びで考慮したいこと(1)

1. 英語での学習から転化しにくい要素がある
2. 基礎的な日本語力習得の時間は必要:
 - ICUが日本語力ゼロから母語話者レベルの者までの多様な学生を受入れていることに留意→JHLも
3. 日本への適応支援 & アイデンティティ形成的側面からクラス環境を考える必要がある
4. 「JLP=シミュレーション」の功罪
 - A) フォームに力を置いた練習が可能、経験が自信に
 - B) 多様な専門に対応する「基本」概念のあいまいさ

JLPの学びで考慮したいこと(2)

5. マンパワーや単位数の問題も重要
6. 全学的連携が必要:
 - A) リクルートの際の思惑の周知徹底
「ICUをどのようなコミュニティとして作るのか」
 - B) 「4年間での学び」という思想の必要性
 - C) 学習支援の手だてをより充実させる